

学習者の小説教材に対する距離感・違和感を基点とした読むことの 授業の構想

—因果関係を軸とした小説の謎解きの読みの展開を見通して—

坂東 茉由加・植山 俊宏・伊藤 汐里

The Concept of a Reading Class Based on the Sense of Distance and Discomfort of the Learner's Novel Materials
— Foreseeing the Development of Mysterious Readings of Novels Centered on Causality —

Mayuka BANDO, Toshihiro UEYAMA, Shiori ITO

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要

第3号 (2021年1月)

Journal of Educational Research
Center for Educational Career Enhancement

No.3 (January 2021)

学習者の小説教材に対する距離感・違和感を基点とした読むことの授業の構想

—因果関係を軸とした小説の謎解きの読みを展開を見通して—

坂東茉由加・植山俊宏・伊藤汐里

(京都教育大学研究生・京都教育大学・京都教育大学大学院教育学研究科大学院生)

The Concept of a Reading Class Based on the Sense of Distance and Discomfort of the Learner's Novel Materials

—Foreseeing the Development of Mysterious Readings of Novels Centered on Causality—

Mayuka BANDO・Toshihiro UYAMA・Shiori ITO

2020年9月30日受理

抄録：中学生・高校生の小説の読みが不振な要因として、小説教材に対する「距離感・違和感」があるとの仮説を立て、それを誘発する教材の記述の分析と中学生の小説の授業における実際の現れ方について考察した。その結果、この「距離感・違和感」の想定は授業構想の有力な視座となるという研究仮説を見いだした。

キーワード：距離感、違和感、言語抵抗、「最後の一句」、「羅生門」、中学生の読みの特徴

I. 中学生・高校生の小説教材に対する距離感・違和感

小説教材に対する読解力の不振については、学習者がそもそも小説に向き合えないことも要因とする声がある。本研究では、この問題を小説に対する「距離感・違和感」の視点から考究するものである。¹⁾

1. 読みにおける距離感・違和感

(1) 読みの前提条件と言語抵抗—距離感の原因—

中学校・高校の小説教材は、すべてが読者である生徒と同時代や近接の時代であることはない。小説が文学史的に近代、現代で区分されてとらえることが一般的であることから分かるように、作品の成立及び作品の時代設定と読者の現在との乖離は、読者に作品世界の理解においてその乖離を埋める知識を要求してくる。これは単に作品の成立時代だけでなく、作品世界の設定も強く関わってくる。これは、生徒にとっては言語抵抗となる。

(2) 言語抵抗を克服、解消させる作品のドラマ性—違和感を感じさせないドラマ性—

この問題は、作品のドラマ性との兼ね合いで考えることが必要である。例えば、平安朝の「検非違使」を知らないで「読めない」とはならず、知らないから詳しくはわからないが、ドラマ性が強く、そこに読者がシンクロできると、その言語抵抗は簡単に乗り越えられてしまう。作品に言語抵抗を感じる知識が出てきても、ドラマ性を強く感じれば、「抵抗」とならず、推論を駆使して読み進めることが予想されるということになる。

2. 作品における因果関係

(1) 作品の「すじ」と因果関係

「すじ」、つまりストーリーは作品中のできごとのつながりだが、それが不合理に展開すると違和感を覚える。この合理性は、ある種の問題発生から端を発して、それなりの問題解決に至る「すじ」によって担保される。つまり、因果関係である。この因果関係の理解の成立は、おおむね読みの成立と考えられる。この因果関係の中核や中心に、読者にとって言語抵抗となりそうな知識が出てくると、読みの成立はおぼつかないことになる。

(2) 本研究のアプローチ

本研究は、小説教材に対する読みの不振をこの「距離感・違和感」に起因するとして、すべての解決を図るものではない。膨大な調査研究、実践研究を無視する意図はないが、ここでは、現場の国語教師が感じる、生徒の

小説中の知識に対する「距離感・違和感」の原因の一端を明らかにし、授業構想に寄与したいと考える。

Ⅱ. 中学校三年生教材「最後の一句」の読みにおける距離感・違和感の発生の想定

1. 「最後の一句」の因果関係²⁾

「最後の一句」は、「船乗り問屋桂屋太郎兵衛」が預かった荷物の横領の罪で「斬罪」に処せられる、と告知がされ、それが免除されるように長女「いち」の主導で子どもたちが願い出て、それが成功し、軽罪となるというストーリーを持つ。それを導く因果関係の存在を「謎」と考え、それに関わる違和感を表の右欄に記述した。

2. 因果関係と学習者が感じる距離感・違和感との関係

大は全体にかかわる大きな因果関係、中は教材の骨格にかかわる中規模な因果関係、小は部分的な関係の成立にかかわる因果関係とした。また、距は、学習者が理解することが困難な知識として距離感を感じると想定される事実、違は、学習者の違和感が想定できる事実を表す。なお、紙幅の都合により主要箇所のみを取り上げた。

3. 「最後の一句」の因果関係と想定される距離感・違和感

| 教材本文 | 因果関係の分析 | 想定される距離感・違和感 |
|---|--|---|
| <p>最後の一句</p> <p>森 鷗外</p> <p>①元文三年十一月二十三日のことである。大阪で、船乗り業桂屋太郎兵衛という者を、木津川口で三日間さらしたうえ、斬罪に処すると、高札に書いて立てられた。市中いたるところ太郎兵衛のうわさばかりしている中に、それを最も痛切に感ぜなくてはならぬ太郎兵衛の家族は、南組堀江橋際の家で、もうまる二年ほど、ほとんど全く世間との交通を絶って暮らしているのである。</p> <p>②この予期すべきできごとを、桂屋へ知らせに来たのは、ほど遠からぬ平野町に住んでいる太郎兵衛が女房の母であった。〈中略〉</p> <p>③その四人は、おばあ様が十七になった娘を桂屋へ嫁によこしてから、今年十六年めになるまでの間に生まれたのである。長女いちが十六歳、二女まつが十四歳になる。その次に太郎兵衛が娘を嫁に出す覚悟で、平野町の女房の、里方から、赤子のうちにもらい受けた、長太郎という十二歳の男子がある。その次にまた生まれた太郎兵衛の娘は、とくとって八歳になる。最後に太郎兵衛の初めてもつけた男子の初五郎がいて、これが六歳になる。</p> <p>④平野町の里方は裕福なので、おばあ様</p> | <p>大「一句」の時代的意味＝「言葉のひとつさき」(広辞苑)の意。</p> <p>①大時間条件の設定。発生→解決。</p> <p>①大徳川吉宗期の治政方針、法体系を前提。</p> <p>①小「さらし」「斬罪」を「高札」により周知。</p> <p>①大「うわさばかり」というこの事件に作用を及ぼす外的な要因の提示。</p> <p>①小当事者と外部的環境条件との関係。当事者「いち」の環境の提示。</p> <p>①中「二年ほど」という時間条件。</p> <p>②小「女房の母」の登場とその「知らせ」との関係は「太郎兵衛の家族」と「世間」との関係を考えれば合理的。</p> <p>③小「孫」の構成の説明を借りた桂屋の家族の説明。「女房」は「十七」で「嫁」に来た。「長女いちが十六歳、二女まつが十四歳」、「女房の里方から」の養子「長太郎」が「十二歳」、三女「とく」が「八歳」、長男「初五郎」が「六歳」という構成。</p> <p>③小「いち」が結婚適齢期になっていること、家名を守る意識が強いことの客観的な要因。</p> <p>④大「里方」の「裕福」が作品中の訴</p> | <p>距時代的表現に対する距離感。</p> <p>距未知の年号、「船乗り業」＝職種、「木津川口」＝地名への距離感。</p> <p>違「さらし」「斬罪」なる原始的刑への距離感。</p> <p>違根拠不明確な「うわさばかり」。</p> <p>違「二年」も「世間との交通を絶」つ理由が不明確。</p> <p>違当時は犯罪者の家族に連絡がないことに対して。</p> <p>違詳細に書かれている「太郎兵衛」の子供の年齢と構成。 →再審時の子供の反応と因果関係あり。</p> <p>違「男子」の存在と「いち」の「願い書」との関係において因果関係あり。</p> <p>違「女房」の「里方」の裕</p> |

| | | |
|---|--|---|
| <p>のお土産はいつも孫たちに満足を与えていた。〈中略〉。</p> <p>⑥厄難にあってからこのかた、いつも同じような悔恨と悲痛とのほかに、何物をも心に受け入れるのでできなくなった太郎兵衛の女房は、手厚くみついでくれ、親切に慰めてくれる母に対しても、ろくろく感謝の意をも表すことがない。</p> <p>〈中略〉</p> <p>⑧高札の立った日には、昼過ぎに母が来て、女房に太郎兵衛の運命の決まったことを話した。</p> <p>〈中略〉</p> <p>この時長女のいち、ふすまの陰に立って、おばあ様の話を聞いていた。</p> <p>⑨桂屋にかぶさって来た厄難というのはこうである。主人太郎兵衛は船乗りとはいっても、自分が船に乗るのではない。北国通いの船を持っていて、それに新七という男を乗せて、運送の業を営んでいる。大阪ではこの太郎兵衛のような男を居船頭と言っていた。居船頭の太郎兵衛が沖船頭の新七を使っているのである。</p> <p>⑩元文元年の秋、新七の船は、出羽の国秋田から米を積んで出帆した。その船が不幸にも航海中に風波の難にあって、半難船の姿になって、積み荷の半分以上を流失した。新七は残った米を売って金にして、大阪へ持って帰った。</p> <p>⑪〈中略〉残った積み荷を売ったこの金は、もう米主に返すには及ぶまい。これはあとの船を仕立てる費用に当てようじゃないかと言った。</p> <p>⑫太郎兵衛はそれまで正直に営業していたのだが、営業上に大きい損失を見た直後に、現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡が曇って、その金を受け取ってしまった。</p> <p>⑬すると、秋田の米主のほうでは、難船の知らせを得たのちに、残り荷のあったことやら、それを買った人のあったことやらを、人づてに聞いて、わざわざ人を調べに出した。〈中略〉</p> <p>⑭米主は大坂へ出て訴えた。新七は逃走した。そこで太郎兵衛が入牢してとうと</p> | <p>訟に関わることの伏線と想定可能。</p> <p>⑥中犯罪及び裁判の結果を「厄難」と表記することの因果関係の説明がない。</p> <p>⑥小「願い書」の作成と再審における「女房」の無能についての情報提示。</p> <p>⑧中「いち」の「願い書」は「うわさ」や「高札」と関係なく、個人的な発想。</p> <p>⑨大犯罪の詳細と事実関係、人物関係に関する情報提示。実行犯と共犯との連携的な関係にあることの背景の説明。</p> <p>⑨大大阪の商法を提示。「太郎兵衛」が大阪の商人の信用にかかわる事件を起こしていることを示唆。</p> <p>⑩大「斬罪」に至る大本となる事実の提示。</p> <p>⑩大「新七」が「売った」残った米の代金の所有関係を明示する。</p> <p>⑪大「新七」は他人の金を詐取する犯罪を持ち掛けた側、「太郎兵衛」は共犯に連なった側。「太郎兵衛」も従犯ながら犯罪に加担したことを明示。</p> <p>⑫大公的な信用と私的な欲との葛藤の存在を示すとともに、商人として信用を失う行為を選択した事実の提示。</p> <p>⑫大「市中いたるところのうわさ」の元。</p> <p>⑬大この他人の金の詐取事件が明るみに出て裁判になった経緯の説明。「秋田」の「米主」が指摘調査の結果をもって、大阪で訴えたという事実は、奉行所としてもないがしろにはできないことになったことを示す。また一度とりあげた以上、判決「高札」を</p> | <p>福さの記述。→訴訟の結着との関係で因果関係あり。</p> <p>違詳細に書かれている「女房」の無能さ。 →再審における有力な役割を果たすはずの人物が機能しないことに因果関係あり。</p> <p>違「いち」個人の問題が大きくなることへ違和感。</p> <p>違冒頭の斬罪が導かれた因果関係への違和感。</p> <p>違大阪の商法をわざわざ示すことへの違和感。</p> <p>距大阪の商法が把握できない距離感。因果関係あり。</p> <p>違「新七」ではなく「太郎兵衛」が「斬罪」になることへの違和感。</p> <p>距（多額の）「現金」の詐取が「斬罪」に相当することへの距離感。</p> <p>距約二年かかった判決。</p> <p>距「新七」が逃亡したこと。</p> |
|---|--|---|

| | | |
|--|--|--|
| <p>う死罪に行なわれることになったのである。</p> <p><中略></p> <p>⑩「ああ、そうしよう。きっとできるわ」と、言ったようである。</p> <p>⑪まつがそれを聞きつけた。そして「姉さん、まだ寝ないの」と言った。</p> <p><中略></p> <p>「私が今夜願い書を書いておいて、あしたの朝早く持っていきましょうね。」</p> <p><中略></p> <p>⑫当時の町奉行は、東が稲垣淡路守種信で、西が佐佐又四郎成意である。そして十一月には西の佐佐が月番に当たっていたのである。</p> <p><中略></p> <p>⑬与力は同役の人たちを顧みて、「ではとにかく書き付けを預かっておいて、伺ってみることにしましょうかな」と言った。それにはたれも異議がなかった。</p> <p><中略></p> <p>⑭西町奉行の佐佐は、両奉行の中の新参で、大阪に来てから、まだ一年たっていない。役向きのことは全て同役の稲垣に相談して、城代に伺って処置するのであった。それであるから、桂屋太郎兵衛の公事について、前役の申し継ぎを受けてから、それを重要事件として気にかけていて、ようよう処刑の手続きが済んだのを重荷を下ろしたように思っていた。</p> <p><中略></p> <p>⑮「参ったのはどんな者か。」佐佐の声は不機嫌であった。</p> <p><中略></p> <p>「それは目安箱をもお設けになっておるご趣意から、次第によっては受け取ってもよろしいが、一応はそれぞれ手続きのあることを申し聞かせんではなるまい。とにかく預かっておるなら、内見しよう。」</p> <p>⑯<中略>それを開いてみて佐佐は不審らしい顔をした。<中略></p> <p>「取り調べはいたしません、十四、五歳ぐらいに見受けます。」</p> <p>⑰ふつつかな仮名文字で書いてはある</p> | <p>出すまで審理が必要になり、市中の関心も集めたことが推測される。</p> <p>⑱<small>小</small>「願い書」つまり再審請願は「いち」の個人的な決意によることを明示。</p> <p>⑲<small>小</small>二女「まつ」だけに「願い書」の件を告知。二か所の<中略>部分では、子どもがすべて身代わりになる道理も説明。養子「長太郎」を除外する提案あり。「願い書」は、公的な影響を想定したものではないことも明示。</p> <p>⑳<small>中</small>当時の司法制度の提示。最終的に重大案件化し、城代、両奉行ともかわることの前提。</p> <p><中略>部分は「願い書」提出を記述。</p> <p>㉑<small>中</small>「願い書」等の案件に対する丁寧な対応が当時の作法であったことを明示。</p> <p>㉒<small>中</small>「太郎兵衛の公事」が難しい裁判であったことを暗示する。「処刑」に持ち込むまでに苦労があったことも示す。つまり、裁判としての不合理性があることを暗示する。「佐佐」が独断専行する性格ではないことを提示。</p> <p>㉓<small>中</small>裁判の蒸し返しは不都合であることを暗示。</p> <p>㉔<small>中</small>当時の裁判制度として直接の請願が認められていたことを示す。とともに正当な手続きが別にあることも示す。「内見」は、少なくとも消極的な対応ではなく、積極的な対応と考えられる。</p> <p>㉕<small>中</small>「願い書」の「条理」と「いち」の想定年齢との不一致の感覚に襲われる。それが今後の裁判の姿勢を狂わせることに因果関係がある。</p> <p>㉖<small>中</small>「佐佐」なりに推論的な判断を行</p> | <p>違 「言ったようである」とはどのような捉え方か、違和感あり。</p> <p>違 「まつ」を登場させることの因果関係が不明。</p> <p>距 なぜ子どもが全員身代わりとなるのかが不明。</p> <p>距 なぜ「町奉行」の職務形態が示されているか不明。</p> <p>違 江戸時代の役人がこんなに丁寧なことに対して。</p> <p>違 奉行の仕事が丁寧なことに対して。</p> <p>違 どうして「重荷を下ろしたように思った」に違和感。</p> <p>違 「目安箱」の突然の出現に違和感。高圧的ではない対応にも違和感。</p> <p>違 「佐佐」の反応、着眼の鋭さに違和感を感じるか。</p> |
|--|--|--|

| | | |
|--|---|--|
| <p>が、条理がよく整っていて、大人でもこれだけの短文に、これだけのことがらを書くのは、容易であるまいと思われるほどである。大人が書かせたのではあるまいかという念が、ふときざした。続いて、上を偽る横着者の所為ではないかと思議した。それから一応の処置を考えた。太郎兵衛は明日の夕方までさらすことになっている。刑を執行するまでには、まだ時がある。それまでに願い書を受理しようとも、すまいとも、同役に相談し、上役に伺うこともできる。</p> <p><中略></p> <p>㉞十一月二十四日の未の下刻である。<中略>書院には両奉行が列座する。奥まった所には別席を設けて、表向きの出座ではないが、城代が取り調べの模様をよそながら見に来ている。</p> <p><中略></p> <p>㉟そこへ桂屋太郎兵衛の女房と五人の子どもとを連れて、町年寄五人が来た。㊱尋問は女房から始められた。しかし名を問われ、年を問われた時に、かつがつ返事をしたばかりで、そのほかのことを問われても、「いっこうに存じませぬ」、「恐れ入りました」と言うよりほか、何一つ申し立てない。㊲次に長女いちが調べられた。当年十六歳にしては、少し幼く見える、瘦(やせ)肉(じし)の小娘である。しかしこれはちとも臆する気色もなしに、一部始終の陳述をした。</p> <p><中略></p> <p>㊳取り調べ役は「まつ」と呼びかけた。</p> <p><中略></p> <p>㊴「初五郎」と取り調べ役が呼んだ。ようよう六歳になる末子の初五郎は、これも黙って役人の顔を見たが、「おまえはどうじゃ、死ぬるのか」と問われて、活発にかぶりを振った。書院の人々は覚え、それを見てほほえんだ。㊵この時佐佐が書院の敷居際(ぎわ)まで進み出て、「いち」と呼んだ。「はい。」「おまえの申し立てにはうそはあるまいな。もし少しでも申したことにまちがいがある、人に教えられたり、相談をしたりし</p> | <p>った。再審について「刑」の「執行」までの時間を計り、「同役」や「上司」との相談も計算した。強引に「刑」の「執行」を急ぐわけではない。</p> <p>「佐佐」の推論は、「いち」の年齢の読み違いから「願い書」を「書かせた」「大人」の存在の疑いへと向いた。予断が萌していることを暗示。<中略>で「町年寄」経由での提出が正当な請願であることを教示した事実を提示。また「城代」、「同役」も列席する再審を決定。拷問道具の提示で「実を吐かせよう」とする作戦も示された。</p> <p>㊶中形式を整えた正式な再審裁判として行われることを示す事実の提示。</p> <p>㊷中「町年寄五人」の出廷は「市中」の「うわさ」と直結する。</p> <p>小「女房」が全く機能しないことを提示。「大人」の「教唆」の最大候補が消滅したことを示す。</p> <p>㊸中理路整然とした「いち」の答弁が示される。</p> <p><中略>部分では、「いち」が「まつ」に相談したこと、「長太郎」も加担したい希望をもっていたので、彼の「願い書」を別に作成したことを答えた。</p> <p>㊹小「まつ」から確認を行う。</p> <p><中略>部分は確認の結果を示す。</p> <p>㊺中「初五郎」の拒否に対する出廷者たちの反応には、「処刑」が難しいことを暗示されている。</p> <p>㊻中「いち」の答弁には「大人」の介在がないことが明確に述べられる。これが「佐佐」の最大の攻撃点であったので、一気に奉行側の形勢が不利になるという因果関係につながる。</p> | <p>距「佐佐」の推論・推理に対して、「奉行」の既存の認識とバッティングすることに対して。</p> <p>距横暴な審理ではなく、綿密な時間の計算の上に審理が計画されることに対して。</p> <p>違「いち」の純粋な行動とのギャップに違和感。</p> <p>距「未の下刻」という時間表現に知識がない。</p> <p>距江戸時代の「取り調べ」の構成員に対する知識が乏しい。</p> <p>違裁判関係者として「町年寄」が出廷していることへの違和感。</p> <p>違「女房」への「尋問」の応答がちぐはぐなことに対して。</p> <p>距「いち」の年齢を考え合わせて、これだけの「陳述」ができることへの距離感。</p> <p>距「いち」たちの「願い書」と「長太郎」の「願い書」の二種類が出されたこと。</p> <p>距「奉行所」で「初五郎」が拒否を示したこと。</p> <p>違厳粛な「取り調べ」で「書院の人々」が「ほほえんだ」ことに対する違和感。</p> <p>距「取り調べ」に「拷問道具」の脅しを使うという当時の「取り調べ」方法に対して。</p> <p>違「佐佐」の言動と「いち」</p> |
|--|---|--|

| | | |
|--|--|---|
| <p>たのなら、今すぐに申せ。隠して申さぬと、そこに並べてある道具で、誠のことを申すまで責めさせるぞ。」佐佐は責め道具のある方角を指さした。</p> <p><中略></p> <p>㉔「そんなら今一つおまえに聞くが、身代わりをお聞き届けになると、おまえたちはすぐに殺されるぞよ。父の顔を見ることはできぬが、それでもいいか。」「よろしゅうございます」と、同じような、冷ややかな調子で答えたが、少し間を置いて、何か心に浮かんだらしく、「お上のことにはまちがいがございますまいから」と言い足した。㉕佐佐の顔には、不意打ちにあったような、驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、陰しくなった目が、いちの面に注がれた。憎悪を帯びた驚異の目でも言おうか。しかし佐佐は何も言わなかった。<中略></p> <p>㉖心の中には、哀れな孝行娘の影も残らず、人に教唆せられた、愚かな子どもの影も残らず、ただ氷のように冷ややかに、刃のように鋭い、いちの最後のことばの最後の一句が反響しているのである。</p> <p><中略></p> <p>㉗桂屋太郎兵衛の刑の執行は、「江戸へ伺い中日延べ」ということになった。<中略>次いで元文四年三月二日に、「京都において大嘗会ご執行相成り候てより日限も相立たざる儀につき、太郎兵衛事、死罪ご赦免仰せいだされ、大阪北、南組、天満の三口お構いの上追放」ということになった。</p> <p><中略></p> <p>大嘗会というのは、貞享四年に東山天皇の盛儀があつてから、桂屋太郎兵衛のことを書いた高札の立った元文三年十一月二十三日の直前、同じ月の十九日に五十一年目に、桜町天皇が挙行したもうまで、中絶していたのである。</p> | <p>㉔中「いち」は個人的な発意による請願なので、拷問道具には全く反応しない。「佐佐」の組み立てた因果関係が成立しないことになる。</p> <p>㉕中「佐佐」は最後の攻撃手段として「身代わり」による「処刑」は、父と生前の再会を不可能にするという脅しをかける。</p> <p>㉖大「いち」に返事は、「願い書」さえ聞き届けられて父の命が救われればいいので、「お上」を信頼するという姿勢を示したまでである。</p> <p>㉗大「佐佐」には別の意味として受け取られたことを示す。一種のダブルミーニングの成立。「お上のことにはまちがいがございますまいから」を裁判の結果の信頼性を疑うと受け取り、痛いところを突かれたと強く反応した。</p> <p>㉘大再審の成立、判決の再検討がほぼ決まったことを示す。</p> <p>中ただ、「一句」で裁判の判決を無にした人間としてのみとらえている。</p> <p>㉙中第一段階として「処刑」の「執行」停止があり、いわゆる上級審の「江戸」幕府に預ける手段が取られた。</p> <p>㉚大審理に三か月かかって上級審である「江戸」幕府から判決の変更が届く。</p> <p>死罪から軽罪への大変更が示される。「大阪北、南組、天満の三口お構いの上追放」は大阪市外への追放である。</p> <p>㉛大朝廷の「盛儀」を恩赦の口実として判決の変更を行ったということ。</p> <p>大「市中いたるところわさ」の結末を推論させる働きがあり、読者に因果関係を把握させる意図が示される。</p> | <p>の言動の大きな食い違いに対する違和感。</p> <p>㉔違本題ではないはずの「父の顔を見る」ことの不可能を持ち出して、尋問している理由に対する違和感。</p> <p>㉕距なぜ父に合わせずに「身代わり」の子どもたちを殺すのか、理由が不明。</p> <p>㉖違「いち」の回答の合理性と「佐佐」の劇的な反応とのギャップが理解困難であり、大きな違和感。</p> <p>㉗距判決の不合理性についての理解不十分からこのダブルミーニングが成立していることの理解が困難。</p> <p>㉘違なぜ「最後の一句が反響している」のかが理解できない。</p> <p>㉙違きわめて合理的に再審が進み、明確な再判決が出たことに対する違和感。</p> <p>㉚違「斬罪」が「追放」という軽罪になったことの理解が困難。「お上」の勝手な変更と勘違いされる公算が大きい。</p> <p>㉛違「大嘗会」がそれほど重要な恩赦の理由として作用するのが理解できない。</p> <p>㉜違「大嘗会」が「市中いたるところわさ」を解消できるかが、見通せないことによる違和感。</p> |
|--|--|---|

4. 『最後の一句』において想定される距離感・違和感の特徴（主に中学生にとって）

(1) 距離感

時代設定が江戸時代であることから、現在を生きる生徒の価値観や歴史的知識と乖離しており、意味が読み取りづらい箇所が多々ある。しかしこれらは、作品理解のための必須の知識であり、相当の距離感を感じさせる。

(2) 違和感

最大の違和感は、「お上のことにはまちがいはいございますまいから」といった「いち」の「最後の一句」が、奉行所に衝撃を与えたことである。個人的な「いち」の希望が、公機関に打撃を与えた理由とその論理は見いだせない。次の違和感は、一転して重罪から軽罪への切り替えとなった判決の変更である。その論理は現代的な感覚では受容しがたい。さらに冒頭の「市中うわさばかり」の結果が示されておらず、違和感を感じさせる。

Ⅲ. 芥川龍之介『羅生門』の読みにおける距離感・違和感

1. 本文における因果関係と距離感・違和感

記号の説明…大/中/小: 因果関係の大きさ・重要度

| 本文 | 因果関係 | 距離感/違和感 |
|--|--|---|
| ①羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠（いちめがさ）や揉烏帽子（もみえぼし）が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。 | ① ^中 「市女笠」「揉烏帽子」が換喩によって「市女笠を被るような上流階級の女性」「揉烏帽子を被るような上流階級の男性」を示している。 | ① ^距 単語の意味と、それをどのような人物が被っていたのかを知らなければ理解できない。 |
| ②なぜかという、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いがつづいて起こった。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。 | ② ^大 当時の荒廃した京都の状況を前提としている。下人の感覚との乖離。 | ② ^距 災害の状況(洛中のさびれ方)や規模の理解(二、三年)が作品の背景理解につながる。史実に当たる必要性。 |
| ③旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹(に)がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道ばたにつみ重ねて、薪の料(しろ)にして売っていたということである。 | ③ ^大 仏具を売らなければならないほど、信仰よりも生活を優先せざるを得なかったという状況条件の設定。 | ③ ^違 大切にすべき仏具を売る。また盗品を表に並べて堂々と売っており、それを誰も咎めていないという状況の異様さ。 |
| ④下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襖(あお)の尻を据えて、 | ④ ^小 使い込まれてはいるが、清潔に身を保つことができていた下人のこれまでの生活ぶりがうかがえる。庇護されてきたまだ若い下人と外の世界とのギャップ。 | ④ ^違 暇を出されて四、五日目の人の着るものに「洗いざらし」という言葉をはたして使うのか |
| ⑤右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。 | ⑤ ^中 下人の若さ・甘さの象徴/終盤にきびから手を離すことで決断・価値観の変容を示す。 | ⑤ ^違 モチーフ的に何度も出てくるにきびの描写。 |
| ⑥ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。 | ⑥ ^大 「永年」下人を使っていた主人の人物像の推察。一定の経済力と下人との信頼関係を想定できる。また、その下人も解雇せざるを得ない洛中の状況や、四、五日分は主人に食べ物や給料を渡されていた可能性の推察。 | ⑥ ^違 二、三年前から災害があったにもかかわらず、主人はここ数日まで下人を雇い続けた。四、五日もさまよっているのに、ぼんやり悩める余裕をもちながら生き延びることができているのはなぜか。 |
| ⑦その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申(さる)の刻下がりからふり出した雨は、いまだに上がる気色がない。 | ⑦ ^大 下人には精神的・体力的に思い悩めるほどの余裕があった。もしくは、若さゆえにそうした思春期のような甘さがあった。 | ⑦ ^違 作品に似合わない。意味は「いたずらに感傷におぼれる心理的な傾向・態度」だが、四、五日も外をさまよい、生死や今後の生活を考えているはずの下人がなぜ感傷に浸る余裕があったか。 |

| | | |
|--|--|---|
| <p>⑧選んでいれば、築地（ついじ）の下か、道ばたの土の上で、飢え死にをするばかりである。そうして、この門の上へ持ってきて、犬のように棄てられてしまうばかりである。</p> <p>⑨雨風の憂えのない、人目にかかるおそれのない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。</p> <p>⑩下人はそこで、腰にさげた聖柄（ひじりづか）の太刀が鞘走らないように気をつけながら、わら草履をはいた足を、その梯子のいちばん下の段へふみかけた。</p> <p>⑪羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。</p> <p>⑫ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の屍骸と、着物を着た屍骸とがあるということである。</p> <p>⑬旧記の記者の語を借れば、「頭身（とうしん）の毛も太る」ように感じたのである。</p> <p>⑭「おれは検非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからおまえに縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていたのだから、それをおれに話さずればいいのだ。」</p> <p>⑮「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」</p> <p>下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。</p> <p>⑯現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯（たてわき）の陣に売りに往んだわ。疫病（えやみ）にかかって死なななら、今でも売りに往んでいたことである。それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいと言うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料（さいりょう）に買っていたそう。</p> <p>⑰わしは、この女のしたことが悪いとは思っていない。せねば、飢え死にをするのじゃて、仕方</p> | <p>⑧中 羅生門の上の死体は芥川の創作箇所であるとわかる。 （参考：方丈記「仁和寺に隆暁法印といふ人…」には「川原に野垂れ死んだような」死体の姿が描かれていることを芥川は知っていたはずである。九条より南（洛外）にはもっと酷い死体もあった。）</p> <p>⑨中 下人は外面や他人からの目を気にする。また死体などを怖がらない性質でもある。</p> <p>⑩中 見栄を気にしている下人。主人に持たされていたのであれば、裕福な主人（貴族？）に仕えていた可能性もある。</p> <p>⑪大 羅生門の下→梯子→上という、物語の場面に応じた境界性。</p> <p>⑫小 結末で着物を盗まれた老婆への安全保障を込めた伏線か。</p> <p>⑬小 語り手の人物像の理解。</p> <p>⑭小 本筋にはさして関係ないが、羅生門付近では既に「検非違使」など機能していなかった場合、老婆と衰微についての認識のギャップが生じているかもしれない、という推論が成り立つ。</p> <p>⑮中 「かつらを作って売る」ことで生計が立てられる。</p> <p>⑯小 身分の高い人に対して偽物を売りつけることで生き抜いていた女の状況。</p> <p>⑰大 飢え死にをすることを避けるために、老婆や女はこのような</p> | <p>⑧違 死体が放置されるのではなく、わざわざ門の上へ持ってきてもらっている。</p> <p>距 葬儀をして埋葬する文化は江戸時代以降。また実際当時の京都では、死体を捨てる場所として羅生門が選ばれたという記録はないはずである。</p> <p>⑨違 下人は寝床として「死人がいることよりも生きた人間に見つからないことの方が優先」する。</p> <p>⑩違 仏具を売るほどであるのに、「聖柄の太刀」という金目のものを売ろうとしない。</p> <p>⑪距 現代の門とは全く違うため、写真や図解で「羅生門」の構造を理解することが必要。</p> <p>⑫違 あえて「裸の屍骸」と「着物を着た屍骸」がいるという情報を仕込んでいる。</p> <p>⑬距 「旧記の記者の語」が方丈記の一節を指している。</p> <p>⑭距 「検非違使」が平安期の警察制度である。</p> <p>違 「旅の者」を騙る必要性はどこにあったのか。</p> <p>⑮距(違)：平安時代の「かつら(付け髪)」の普及度と需要。</p> <p>⑯距 「太刀帯（たてわき）」という役職。（東宮坊（皇太子に関する事務をつかさどった役所）の舍人（下級官人）のうち、武器を帯びて東宮の身边および御所の警備に当たった者。東宮帯刀。）</p> <p>⑰距 老婆や女の行動を、仏具を盗み売るような当時の京都の状況と照らし合わせながら理解する必要</p> |
|--|--|---|

| | | |
|--|---|---|
| <p>がなくしたことであり。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にををするじゃて、仕方がなくすることじゃわいの。じゃて、その仕方がないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目にみてるである。」</p> <p>⑱下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。</p> <p>⑲老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這っていった。</p> | <p>行動を取らざるを得なかった。</p> <p>⑱小 下人の認識の変容を示す。また、下人は「かつら」の商品価値を知らなかった可能性。</p> <p>⑲中 盗みか正義かを悩んでいた下人と、生きるか死ぬかの世界で生きる老婆の価値観や意識のギャップを推察できる。</p> | <p>がある。（現代の感覚で盗難や欺瞞を理解しない）</p> <p>⑱違 物語前半とは打って変わった「すばやく」い行動。また、かつらは奪わなかったのか。</p> <p>⑲違 なぜ老婆は、「うめく」だけでなく「つぶやく」いたのか。そのつぶやきの内容は何だったのか。</p> |
|--|---|---|

2. 『羅生門』における距離感・違和感の特徴

(1) 距離感

時代設定が平安時代であることから、生徒の価値観や歴史的知識と乖離しており、距離感があるが、これらは、「当時の京都の荒廃ぶり」と「下人の思い悩み」とのギャップを適切に理解するために必須の知識である。

(2) 違和感

一読では気づかないかもしれないが、下人の心境や身なり・様子と、それに対する荒廃した京都の様子が浮き彫りになっているような描写が意図的になされている。これらを読み飛ばさず丁寧に着目し、生徒に違和感・不合理的を適切に感じさせることで、『羅生門』の世界観と下人の心情の不調和を掴ませることができる。このことは、『羅生門』を単に「どんな状況にあっても盗みはいけないと思った」というような理解で留まらせない、生徒の中に「生」のドラマを成立させるための手立てにもなりうる。

IV. 中学生における小説の読みにかかわる距離感・違和感の事例

距離感・違和感が読みの学習を大きく左右すると考えられる中学生においては、適切な距離感・違和感を持って読解を進められれば良いのだが、距離感・違和感によって読解につまずいてしまい、読解を止めてしまう場合(拒否)や、物語の因果関係を的確に読み取れない場合がある。一方で、距離感・違和感に引き付けられた結果、因果関係とは離れた部分的な読みの印象のみが残る場合もある。

1. 主要小説教材において距離感・違和感が読みに作用した事例

想定される読みの反応と読みの結果・感想の事例を区別して記述する。

(1) 1年生教材

○「大人になれなかった弟たちに……」米倉斉加年

(反応・結果・感想) ミルクはヒロユキの大切なご飯だと分かっているが、盗み飲みをしてしまった「僕」の心情に寄り添って考えられない。またその行動の理由も理解できない。

○「少年の日の思い出」ヘルマン・ヘッセ

(反応) 「客(友人、彼、後半の『僕』)」と「私」の関係性が読み取れず、前半と後半の関連性を考えられない。

(結果・感想) 「前半のセリフは誰が言っているのか」、「なぜ前半部分があるのか」が分からなかった。

(反応) 語り手が「僕」視点であるため、僕の心情に入り込みすぎることによって、「僕」と同じように「エーミール」を敵対視して読んでしまう。客観的な読みができない。

(結果・感想) 「『僕』はエーミールに悪漢だと決めつけられてしまい、大切にしていた自分のちょうをつぶさないといけなくなって、『僕』が可哀そうだと思った。」

(2) 2年生教材

○「盆土産」三浦哲郎

(反応) 家族の優しさやあたたかさを感じ取れる文章であるのに、父が出稼ぎに行き、母は亡くなっているという人物設定への距離感から「悲しい話、可哀そうな話」とまとめてしまう。

(結果・感想) 「お父さんは普段家にいなくて、お母さんは亡くなっているから悲しい話だと思った。」

○「走れメロス」

(反応) メロスとセリヌンティウスの友情のみに着目してしまい、友情談だと捉えてしまう。

(結果・感想) 「メロスとセリヌンティウスはお互いに信じあっていて、固い友情で結ばれているのだと思った。」

(結果・感想) 「メロスが言い訳や開き直りをしているところが長すぎると思った。」

(3) 3年生教材

「故郷」魯迅

(反応) 「私」と「ヤンおばさん」との関係性を描くことで、置かれている状況の違いを表現しているにもかかわらず、ヤンおばさんの人物像のみに着目して、両者の関連を読み取れない。

(反応) 「私」と「ルントウ」の身分の違いを理解できず、なぜ関係性が変わってしまったのかが分からない。

(結果・感想) 「子どものころは仲良くしていたのに、大人になってから再会して他人行儀になってしまったのかが分からなかった。」、「ヤンおばさんの動作が面白かった」。

(反応・結果・感想) 中国特有の時代背景、文化への距離感。「香炉と燭台、偶像崇拜にどういう意味があるのかが分からなかった。」「ルントウの話は本当に面白そうで、私もチャーを見てみたいと思った。」

2. 中学生の感じる距離感・違和感の特徴

(1) 中学生の感じる距離感の特徴

まず、時代背景や歴史的知識の不足により、登場人物の心情や行動の意味が捉えられないことが見受けられる。また単純なドラマとしてとらえてしまい、一次的な反応により「悲しい話、可哀そうな話」とか、「友情談」としてとらえることも特徴として挙げられる。さらに、上記の反応が作用して、複数の登場人物相互の心情や行動が捉えきれず、ストーリーに関係性を見出すことができないこともまた特徴である。

(2) 中学生の感じる違和感の特徴

作品にしばしば登場する大人の側の論理・習性と子どもの側の論理・習性を区別し、調節して捉えられないため、小説の中心的なストーリーを受け入れることができないという違和感がある。思春期の中学生が両者の立場を踏まえながら読むことが困難であることに起因すると思われる。また読者自身の感覚を優先させてしまい、悪役的な登場人物は単純に憎んだり、小説の中の時間経過に従わずに主観的に判断したりする特徴もある。

V. 結語

中学校教材「最後の一句」と高校教材「羅生門」に関する生徒が感じる距離感・違和感の想定分析、及び中学生の読みの実例の分析を行った。その結果、この距離感・違和感の想定は、小説の授業構想の有力な視座を与えるという研究仮説が見いだせた。今後、授業記録等の分析も重ねて、この研究仮説の検証を図っていきたい。植山が、「Ⅰ。」と「Ⅱ。」を、伊藤が「Ⅲ」を担当した。坂東は、「Ⅳ。」と「Ⅴ」を執筆するとともに全編にわたって主に中学校国語科授業者の視点から「距離感・違和感」の分析記述について監修した。

<参考文献>

- 1) 違和感を基にした小論文指導の研究として次の者がある。小野田磨袖「中学生段階の「違和感」を活用した意見文の推敲活動に関する研究」『京都教育大学国文学会誌』第48号/pp. 49-62/2020. 6
- 2) 植山俊宏「謎解き「最後の一句」—問題解決的な小説の読み方—」『愛媛国文研究』第68号/pp. 44-60/2018. 12